

個別指導と小集団指導を効果的に組み合わせた自立活動の実践

南富良野町立南富良野西小学校 学級数6(3) (校長 長岡 勇樹)

I 実践のポイント

児童一人一人に身に付けさせたい資質・能力の育成に向け、自立活動において、主体的な問題解決能力や生活技能の向上を図るため、個別指導と小集団指導「わくわくタイム」を関連付けて実施している。

【自立活動の区分：人間関係の形成・身体の動き・コミュニケーション】

- **個別指導** (小集団指導時の動画や画像から振り返る場面、自己開示の場面など)
 - ・個の発達の段階に応じた言葉の学習や教師と一対一の話合い活動等を実施する。
 - ・小集団指導に向けた準備を通して、児童の意欲の向上を図る。
- **小集団指導** (遊具を使った遊び、ゲームなどの活動、調理活動、栽培活動など)
 - ・仲間と協力する活動を通して、コミュニケーションや認知の能力、運動動作の発達を促す。
 - ・モデルである教師や児童を見て、ロールプレイを行うことにより、個々の生活スキルの向上を図る。
 - ・具体的な場面のロールプレイを通して、社会性やコミュニケーションに関するルールを理解を図る。



【協力してパラシュートで遊ぶ様子】

II 内容

1 実践の経緯

本校は、全校児童数19名で、通常の学級が複式3学級、特別支援学級が障がい種別に3学級の小規模校である。特別支援学級は、各学級1名在籍しており、自立活動については、基本的に教師と一対一で学習してきた。今年度から特別支援学級に在籍する3名の児童で小集団の自立活動を週一時間設定し実施している。

教師は、学年や障がい種別の異なる集団の中で、一人一人が目標を達成できるよう、同じ活動でも個に応じた声掛けや支援の方法を充実させるとともに、自分の気持ちを仲間に伝える場面やコミュニケーションをとって助け合う場面の設定など、小集団のよさを生かした活動となるよう意識している。

また、個別指導で学んだ内容が小集団指導の中で発揮できる場面を設定することで、確実な定着と児童の自信につながるよう、学習内容を毎時間調整して進めている。



【相手の気持ちを考える様子】

2 個別指導と小集団指導の年間計画における関連性

◆個別指導年間指導計画

◆小集団指導「わくわくタイム」年間指導計画

| 月 | 回 | 活動名とねらい |
|---|---|---|
| 4 | 1 | 『はじめまして①』 ・「わくわくタイム」について ・自己紹介って何だろう。 ・自己紹介の内容を考えよう。 |
| | 2 | 『はじめまして②』 ・声の大きさや視線の向きなどに気をつけて、自己紹介してみよう。 ・動画でチェックしてみよう |
| | 3 | 『すてきなあいさつ①』 ・「わくわくタイムを振り返ろう」 ・自分のがんばりと仲間のよかったところ ・あいさつって何だろう |

| 月 | 回 | 活動名とねらい |
|---|---|---|
| 4 | 1 | 『はじめまして』 ・自己紹介をすることができる。 ・1年間の学習の流れを知り、活動の意欲をもつ。 |
| | 2 | 『あいさつをしよう』 ・声の大きさや視線の向きなどに気をつけながら、正しいあいさつのスキルを身に付ける。 |
| | 3 | 『忍者であそぼう』 ・忍者やしきに入ったつもりで、様々な動きを体験することにより、認知や感覚の機能を高める。 |

教科・領域との関連

III 実践の成果(○)と課題(●)

- 児童は「わくわくタイム」を楽しみにしており、活動に対して高い期待をもっている。
- 自分の気持ちを言葉で伝える機会を設定したことで、周囲の人に伝わる喜びを感じている。
- 個別指導と小集団指導の相乗効果に加え、自立活動の目標を教科・領域の中で意図的に取り入れた指導を行うことで、児童が様々な生活場面で活用できるようになった。
- 個人差のある児童が、主体的に活動できる内容や場面を設定する必要がある。
- 「わくわくタイム」に関わる教員が、全児童の目標を共通理解し、声掛けや支援を一貫する必要がある。

実態把握に基づいた個別の指導計画の改善と教員の資質向上に向けた実践

和寒町立和寒小学校 学級数6(4) (校長 福田 孝夫)

I 実践のポイント

- 特別支援学級に在籍する児童の学びを一覧化し、実態を踏まえた「個別の指導計画」の作成
- 特別支援教育の専門性向上に向けた校内研修の取組

II 内容

1 実践の経緯

本校の特別支援学級は4学級16名の児童が在籍しており、特別支援学級に在籍する児童は障がい
の程度や実態等を考慮した上、教科によっては下学年の学習内容を学んでいる。このような下学年
の学習内容を学んでいる児童が進級した際に、新年度の学級担任は、現在の学習内容と個々の児童
の理解度を把握することに多くの時間を費やす実態があったことから、個の学びを可視化し、円滑
に引き継ぐ必要があった。そこで、児童個々の学びを把握できるよう「学びの一覧」の作成に取り
組んだ。

2 学びの一覧を作成

特別支援学校小学部学習指導要領に示されている各教科の第一段階から第三段階と小学校学習指導要領に示されている全教科の第1学年から第6学年までの内容を一覧表にして示し、これまでに児童が学んできた内容と理解している内容を色分けした「学びの一覧」を全児童分作成した。

| | | |
|------------------------|---|--|
| 知識および技能 (言葉の特徴や使い方) | 日常生活でよく使われている平仮名を読むこと。 | 日常生活でよく使う促音、長音などが含まれた語句、平仮名、カタカナ、漢字の正しい読み方を知ること。 |
| | 身近な人の会話を通して、物の名前や動作など、いろいろな言葉の種類に触れること。 | 言葉には、意味による語句のまとまりがあることに気付くこと。 |

【学びの一覧】

3 校内研修及び特別支援教育研修による専門性の向上にむけた取組

本校の特別な教育的支援を必要とする全児童について全教職員が共通した理解を深めるために、校内研修においてインシデント・プロセス法を用いたケース会議を行った。インシデント・プロセス法は、準備が少なく教職員が自分の立場や経験を生かして支援の方策を交流できるため、対話的で活発な研修とすることができた。

また、特別支援教育に関する専門性を高めるため、特別支援学級を担当する教員を対象に、校内研修において特別支援教育スーパーバイザーに講師を依頼し、講義を行った。研修内容を生かすため、研修を受けた教員から全教職員に向け、通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童への指導・支援の方策及び特別支援教育を生かした学級経営や授業づくりの工夫について、学校全体で情報共有する場を設定し、実践につなげることで、より一層分かりやすい授業に改善が図られ、安心できる学級・学校に向かうと考える。



【校内研修の様子】

III 実践の成果 (○) と課題 (●)

- 「学びの一覧」を作成することで、個別の指導計画の内容について教員間で差がなくなり、引継ぎがスムーズに進み、児童が不得意とする教科へ早い段階からフォローできるようになった。
- 特別支援教育に関する専門性を高めるため、インシデント・プロセス法を用いたケース会議と専門的な講義を校内研修として実施したことで、学校全体の特別支援教育に対する意識の向上が見られ、通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童の対応に学級担任と特別支援学級担任が一層協働する姿が見られるようになった。
- 「個別の指導計画」について、「個別の教育支援計画」との関連や自立活動の内容と各教科等とのつながりが分かりやすく表現できる様式の工夫と内容の充実を図る必要がある。